



訪ねた教会はスターリグランドの郊外にあるプロボスカの町にあるFortress Church。トルコの略奪に備えて、教会が城砦化している。側面には四角い銃口があいている

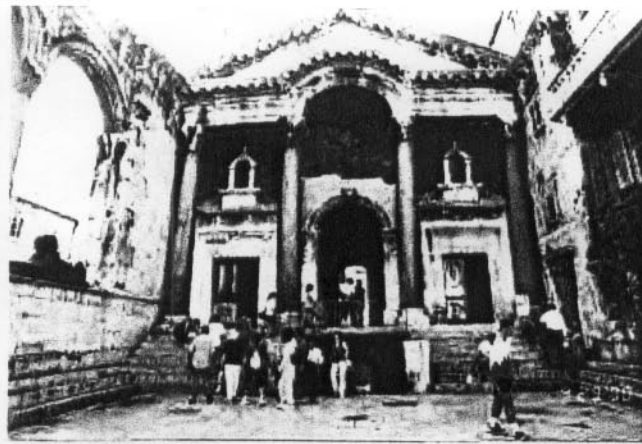
私の目的を知ると午睡していた神父さんをたずね、教会をあけてくれるよう頼んでくれました。

こうして私は、まぼろしのティツィアーノ、ペロネーゼに接しましたので、これを日本に伝えるためぜひ、撮影したく思いました。神父もその気持ちはわかってくれるのですが、撮影は原則不可です。そこで私は教会に対し、少し多額の寄付を申し出ました。神父はかすかに驚いた様子でしたが、間もなく、姿を消しました。イボさんが「いま撮れ」というので貴重な撮影ができました。

お礼にイボさんを夕食に招待しました。料理はイボさんのすすめでラズリーチュにしました。さまざまな肉の串焼きでどのレストランでも、まちがなくなぐまいののは、これだということです。ワインが入るとイボさんはおしゃべり好きでした。年金は月3千円だが、スプリートとブルボスカの二カ所に家をもっており、自動車とボートを持っている。ウイークデーはスプリートで、万能修理工として仕事する。自動車でも家でも何でも直す。そして週末はブルボスカで、ボートで漁をする、ということでした。冬は一晚にイカが3、4キロとれる。1キロ800円で売れるから、3千円の収入になるということでした。平均月収1万円のクロアチアでは、大変な収入です。

翌日は、今度は、イボさんが自分の家に招いてご馳走をしてくれました。外側は何百年前のままで、内部は心地よく改装してありましたが、床、壁、配管、電気の配線から食器棚、テーブルといった家具まで、全部、自分一人でやっただと言っていました。半信半疑でしたが、六畳ほどもある工作室に案内されて納得しました。あらゆる工具がそろっているのです。大量に失業者がいても、この国の生産活動が止まっているわけではないのです。それにしても、日本人が器用というのは、いつのことだったろうと思いました。

スプリートの船長一家



デオクレチアヌスローマ皇帝がここスプリートに建てた宮殿の中庭(AD300)。引退後ここを隠居所とした。彼の死後、代々の皇帝の隠居所としても使用された。



スプリートの近くにあった当時の都ソリンがトルコの侵略にあった時、その住民がこの宮殿に逃げ込んだ。この避難民救済のため、宮殿内に建てたアパートに、今でもその子孫が暮らしている。

ファールのマリーナを歩いているとき、ヨットの上から、ほとんどイタリア人のような気安さで、声をかけてきたスキッパー(船長)がいます。ピラさんです。聞くと、島めぐりでアドリア海を楽しみたい人のために、スプリートとドブローブニクの間で、クルージングのサービスをしているとのこと。ドイツ、フランスの金持ちがお客のようです。二本マストの印象的な船形なので、設計者の名前を聞くと、アメリカズカップの艇を設計したヘレンシヨフだということで、「知っているよ」というと、非常に喜んで、急に親しさが増しました。